帯大研報 37：48～63（2016）

関東大震災はいかに回想されたか（一）

――自伝に描かれた関東大震災――

How was the Great Kanto Earthquake recollected? (1):
The Great Kanto Earthquake described in an autobiography

Jun'ichi SHIBAGUCHI

柴口　順一
（帯広畜産大学人間科学研究部門）

二〇一六年四月二十八日受付
二〇一六年六月　三日受理

はじめに

自伝は、研究対象としてはおそらく最も遅れているジャンルである。小説、詩歌、評論とは比べようもなく、また随筆、日記、戯曲などと比べても手薄であることは否めない。自伝に関する研究は、一九七〇年代まではほとんどなかったといって過言ではない。七〇年代に入り、ようやく本格的な研究といえるものが登場するが、それもごく一部の人による研究にとどまり現在に至っている。

私は、かつて大岡昇平における歴史というテーマを論じた際に、その幼少年期を対象とした自伝である『幼年』（『別冊潮』一九七一・一、『季刊日本の将来』一九七一・五～七二・一一）と『少年――ある自伝の試み』（『文芸展望』一九七三・四～七五・七）を取り上げた（注1）。自伝とは、いわば自己の歴史を記したものであるから、それは是非とも取り上げなければならない作品であった。そのためには、むろん他の自伝を参照する必要がある。自伝研究の蓄積がほとんどない以上、いきおい手さぐりにならざるを得ない。大岡の自伝は、対象を幼少年期に限ったものなので、とりあえずは対象が幼少年期に限られたものを選び、かつ大岡のものに匹敵する記述量を持つ自伝に限定することにした。『幼年』と『少年』を合わせれば、並の自伝をはるかに超える大部の作品だったからである。したがって、その数は極めて限られたものであった。それらの自伝と比較した論もその後まとめた（注2）。それは、自伝に関するひとつの横断的研究とも言えるであろう。

その横断的研究を、焦点をしぼり大規模な形で行なえないかと考えたのが本論のもともとの発想である。これまでの限られた自伝研究においても、そのような研究は皆無であった。そのいずれもが、個々の自伝研究の積み重ねという域を出るものではなかったのである。そこで考えたのが、ある社会的な事件や出来事がそれぞれの自伝においてどのように捉えられ、また描かれているかを明らかにし

ていくことであった。その具体的な事件・出来事として選んだのが関東大震災である。むろん、他にも色々な選択があり得る。たとえば戦争。おそらくは、社会的な事件・出来事で最大というべきものは戦争であろう。すべての人が何らかの形で否応なく、しかも甚大な影響の下に経験せざるを得ないからである。しかし、日清戦争からはじまり太平洋戦争にいたるまで、戦争は多くまたその期間も長い。仮にひとつの戦争にしぼったところで、その様相はあまりにも多用であり、拡散は避けられないであろう。その意味で、関東大震災のような出来事が適当と判断したのである。すべての人が経験したわけではないが、少なからぬ人がいわば直接的に経験し、しかもその影響が多大な出来事であるといえるからである。

関東大震災を選んだ理由はもう一つある。それはほかでもない。大岡の自伝においてもそれは詳細に描かれ、かつ極めて印象的な記述であったからである。大岡におけるそのような経験が、他の自伝ではどのように描かれているのかという興味が自然とわきあがってきたのである。それは、大岡の自伝を相対化するためのひとつの視点にもなり得ると考えたことはいうまでもない。

東日本大震災の発生も、その計画を後押しするような形になったことは否定できない。およそ九十年前に起こった、しかも今回の震災に勝るとも劣らない大震災を様々な形で明らかにすることは、今回の東日本大震災を考える上でも、また今後も起こり得るであろう震災のことを考えていく上でもその意義は決して小さくないと考えられるのである。

一つ付け加えていっておけば、実はこのような研究が可能なのも、自伝というジャンルの一つの特質といってよいであろう。基本的には実際のことが記されている、あるいは実際のことがもとになっているのが自伝といえるからである。関東大震災という実際の出来事があり、かつその出来事が記されているという前提があってはじめて成立するのである。その意味で、自伝というジャンルに関する研究としても適した方法といえるであろう。

自伝研究は最も遅れている分野だと述べたが、自伝リストに関してはある程度まとまったものが存在する。『日本人の自伝』全二十五巻中の別巻Ⅱ（平凡社一九八二・一一）所収の「付録　書目一覧」である。これは、今から三十年以上前の古いものになるが、本研究にとっては極めて有効である。仮にこの書が刊行された一九八二年に書下ろしとして出版された自伝があり、そこに関東大震災に関する記述があったとするならば、その著者は六十歳を超えているはずである。五十九年前の一九二三年の関東大震災を体験し、かつ記憶していなければならないからである。つまり、このリストだけで八二年に六十歳以上になる人物、あるいはなるはずの人物の自伝はカバーできることになるのである。

この自伝リストをもとに、他の様々な資料を参照しながら、おおよそ年代的（時間的）に判断して関東大震災が描かれている可能性のある自伝にあたった。地域的（空間的）な要素も考慮に入れるべきとも考えられるが、本研究ではその方法はとらなかった。というのは、それぞれの自伝作者が震災時にどこに居住していたかを一つ一つ検証していくにはそれ相応の時間を要するからである。また、関東大震災における地震はかなりの広範囲に及んでおり、地域的にどのあたりで区切ればよいかを判断するのが難しいという問題もある。むしろ、あらかじめ地域的に狭く限定しないことで、地震がどの地域にどの程度及んでいたのか、あるいはいなかったのかといったことも明らかになってくると考えたのである。

その結果、これまでに九〇〇冊あまりの自伝にあたることができた。しかし、それらの半数以上の五〇〇冊あまりには、関東大震災に関する記述は含まれていなかった。ただし、それらのなかには震災が起きた時期を記述の対象としていないものも少なくなかった。自伝は必ずも全人生を記述の対象とするわけではない。半生（前半生あるいは後半生）を描くものもあれば、ある一時期を描いただけのものも存在する。それにしても、それだけ自伝において、かつこれだけ大きな出来事が何ら触れられていないことをいかに解釈すべきなのかは、また別の課題になり得るであろう。

以下、記述のある四〇〇あまりの自伝について検討するが、地名については、基本的に東京以外は道府県名と市町村名を、東京の場合に限り区名と町名を記すことにする。もちろん、市町村名あるいは町名まで判明しないものは、道府県名あるいは区名までにとどめざるを得ない。市町村の区分と名称は当時とは異なる

ものがあることは周知のとおりだが、すべて現行の名称で記す。東京の場合も同様である。震災当時、東京は十五区で、その範囲も現在と比べかなり小さかった。したがって、そのかなりの部分が当時東京ではなかったことになるが、すべて現在の東京二十三区の区分、名称に改める。町名も同様である。

関東大震災の被害は、東京・横浜をはじめとする関東地方が中心であったことはいうまでもないが、それ以上のかなり広い地域にも及んでいる。また、直接的な被害がなかったとしても、地震の揺れはそれ以上の広範囲にわたっている。そこで、周辺地域の記述から見ていくことにしたい。だが、さらにその前段階として、揺れ自体は経験しなかったものの、ほど経ずして情報として知るという経験をした人々の記述に触れておきたい。

一　海外――ヨーロッパ

まずは海外において知った場合である。関東大震災の報は、海外へもいち早く伝えられている。収集したもののなかには、当時海外にいた人物も少なくなかった。なお、国名及び都市名は国内の場合と同様、基本的には現行の名称で記す。したがって、当時日本領であった地もそれに含める。

ドイツ――ベルリン・ハイデルベルク

ドイツのベルリンには七名もの人物がいた。

梶井剛（注3）は、早くも九月一日に知ったという。逓信省の職員であった梶井は出張でベルリンに滞在していた。ホテルでの晩餐会の最中、参会者から、東京で地震があったが心配ないのかと聞かれた。日本では頻繁に地震があり、そんなことを気にしていたら仕事なんかできないと答えてその場は済ませたが、翌二日の朝刊を見て大変なことが起こっていることを知る。「百万人の人間が死んだ、伊豆大島も海中に沈没した」といったことが書かれていた。「東京で百万人も死んだんじゃ、われわれの家族もだめだ、逓信省の人も死んでいるだろう」と絶望的な気持になった。情報を得るために日本大使館や日本人クラブへも行ったが、「その間することもないし、酒を飲んでは不安と焦燥を紛らわせてい」たという。それから二、三日して電報が届き、家族みんなの無事を知った。「みんな非常な不安にとらわれ、仕事なんかやめて、シベリア鉄道で日本へ帰ろうという人もずいぶんありましたし、実際に帰った人もいました。」という記述は注目しておきたい。

小野秀雄（注4）は、九月二日の午後に報に接している。『東京日日新聞』の記者を辞め東京帝国大学で学んでいた小野は、ドイツに留学中であった。友人が知らせに来たというのだが、その内容は「日本に大地震が起こって東京は全部倒壊全焼、江の島は海中に没入した、富士山も形が変わり、内乱の起こる恐れがある」というものであった。友人はそれをアメリカから届いた電報で知ったという。東京への電話申し込みは当分受け付けていないということだったので、電報を『大阪毎日新聞』の部長へ送った。本郷に残してきた妻の母と新聞関係の研究資料が気にかかっていた。四日目の朝、「ハハ、ショモツブジ」という返電があった。三日三晩一睡もできなかった妻も大喜びで、感謝の返事を打電した。妻もベルリンに同道していたのである。梶井剛は、日本大使館から何らかの情報を得たとは記していなかったが、小野は「日本大使館も、国際通信社からの入電をその都度提示した」と記し、「そのうちに、反乱はすでに大阪に及べり」などといったものがあったと述べている。やがて、「本社からの相当詳しい報告がシベリア経由」で到着し、虚報や誇大憶測報道などがあったことを知り、胸をなでおろしたという。

伊藤清（注5）は、九月三日の新聞で知った。長崎地方裁判所の判事であった伊藤は、司法省の嘱託を受けベルリンに滞在していた。「東京、横浜はもとより東海道の半分は、地震につぐ火災と洪水のために滅失したかのように報ぜられた。」とある。「洪水」とあるが、津波のことであろう。ちなみに、「洪水」ということばは他のものにはほとんど見られない。その後、最初の流説ほどでもないことが次第に明らかになった。梶井剛の自伝には、シベリア鉄道で日本に帰った者もいたという記述があったが、伊藤にも同様の記述がある。「ベルリンの留学生数百人は急に団体を作り、特別列車を仕立てロシアを経由して帰国した。」と

いうものである。数百人の留学生というのはにわかに信じがたいが、伊藤は一行には加わらなかった。注目すべきなのは、「支那料理屋の食卓に東京付近朝鮮人虐殺のビラを頒布されたのには嘆息せざるを得なかった。」という記述である。「朝鮮人」に対する虐殺については、のちに見る様々な自伝においても多く記述されているところだが、この段階ですで外国にも伝わっていたのであろう。

勝沼精蔵（注6）も新聞によって知ったが、日付は記されていない。愛知県立医学専門学校教授であった勝沼は、海外研修でベルリンいた。新聞には「死傷三百万人、大阪・東京間に一軒の家も残っていない。」と書かれていた。大使館へ行って聞いたが、「ニュースがない」とのことだった。そのうちに、無事を知らせる妻からの電報があった。妻は念のためにシベリア経由とアメリカ経由、それともう一通の三通を打電したそうだが、手元に届いたのはシベリア経由のものだけだったという。「これは私どもの身辺としては、日本からのどのニュースより早い、待ちこがれた第一報であったから、私はこれを大使館の壁に貼付して、人々に披露したことを覚えている。」という記述もある。その後、「東京では火事はひどかったが、地震そのものはそれほど激甚ではなかったこと」を知らされた。「死傷三百万人」に比べれば確かに「激甚」ではなかったといえるかもしれないが、地震は「激甚」以外の何ものでもなかったことはいうまでもない。だからこそ、ひどい火事が起こったのである。ちなみに、「当時はドイツの人々も、私たち日本人にたいして深い同情をよせてくれた。」という記述もある。

里見岸雄（注7）は新聞の号外で知ったが、やはり日付は記されていない。その後、夕刊を何種類も買い集めて読んだ。号外あるいは夕刊といっているところからすると、九月一日の可能性もある。国柱会を創設した田中智学の息子で、早稲田大学を卒業して間もない里見は、ヨーロッパ遊学中ベルリンに滞在していた。「大使館へ廻って様子を聞いたが、何の詳報もない」と、勝沼精蔵と同様なことを述べている。だが、新聞は一報ごとに惨禍の拡大を伝え、「死者三百万、或は五十万」などと報道され、「船舶悉く覆没す」、「江の島が消えてしまった」といった報道もあった。ただ、「宮城は御安泰であり、避難民のために皇居の一部が開放され、二重橋前には近衛兵が厳然と天をこがす炎の中に立哨してゐる」という記事もあり、それを見た時は「何ともいへぬ感動であった。」と述べている。ただし、この記事の表現は多分に粉飾されているであろうことはいうまでもない。九月六日、里見は「海外より祖国の大難を懐ふ」と題した一文を名古屋の新聞に寄稿した。そして、二週間目に入ってやっと日本からの電報が来て、父母以下全員の無事を知ったという。シベリア鉄道で帰国した人々については先にも見たが、それについても次のような記述がある。「まだ、国交のなかったソ連が、同情して、震災のため帰国する日本にシベリヤ鉄道の利用を申出たのもこの時で、何人かの日本人は、その好意で陸路帰国の途についた。」というものである。

石井漠（注8）もまた新聞で知ったが、それは謄写版刷の日本人新聞であった。日付はやはり記されていない。舞踊家である石井はヨーロッパ各国を公演中、ちょうどベルリンに滞在していた。新聞には「東京横浜全滅」と記されていた。石井もまた大使館へ駆けつけるが、そのときの様子はこれまでの人々の場合とは異なっている。「大使館の掲示板は一杯の貼り紙、家族のいる下谷区根岸のあたりを掲示板の図面で見ると、真つ黒に消されてしまつている。」と記されていた。被災地の地図といった情報までが示されていたのである。だが、家族からの無事との連絡を受けたのは三か月ほど後だった。これまでの人々に比べてずいぶんのんびりとしているが、半ばあきらめて、仲間と安ビールを飲んでは慰めあったという。「時にはゲラ〳〵笑つたりした」ので、宿の婆さんから叱られたといった逸話もある。

向坂逸郎（注9）もいつ何によって知ったのかは記されていない。東京帝国大学の助手であった向坂はドイツに留学していた。「まるで日本全体が破滅したようなさわぎであった。しかし、時がたつにしたがって、破壊の状態も正確になった。」という記述と、落ちついてくると為替相場が正常になったという記述があるだけである。

以上がベルリンで知った人々だが、これら七人の人物におけるそれぞれの交流についてはいずれの自伝にも記されていない。ただ、七人中五人が大使館へ行っていることを考えれば、そこで顔を合わせることがあったことは十分にあり得るであろう。

羽仁五郎（注10）はハイデルブルクにいた。東京帝国大学の学生であった羽仁はドイツ留学中であった。「ハイデルベルク市の新聞」で知ったと記されているが、それには「東京はまったく破壊された」と報道されていた。もう少し詳しく実情を知りたいと思い、パリに行ったというが、それがいつのことかは記されていない。パリでニュース映画を見て、東京に戒厳令がしかれたこと、「朝鮮人」が大量虐殺されたこと、社会主義者や労働運動の指導者が虐殺されたことを知った。また、世界各国からの救援物資を人々に届けることを日本政府はしなかったとも記されている。「横浜の港にはいってきた最初の救援船は、ソヴィエト・ロシアからのレエニン号であったが、日本帝国政府はこの救援船第一号を入港させなかった。」という記述もある。それもまたニュース映画で知ったことかどうかは判然としない。震災の報を機に帰国した人々についての記述は先にも見たが、知人の池谷信三郎が急いで帰国したことも記されている。池谷信三郎は、早世した小説家、劇作家である。

フランス――パリ

羽仁五郎は震災の報に接しパリに向かったが、パリで報を受けた人物も三名いる。

佐藤尚武（注11）は九月一日夜遅く、アメリカからの電報で知った。佐藤は、在フランス日本大使館の参事官であった。「東京は全部焼失、江ノ島が海に没した」ということであった。佐藤は「かなり誇張されたもののようであったにしても、たいへんな震災であることだけは察知されたのである」と述べている。他には、外務省と連絡を取るのも非常な困難を感じたという記述があるだけである。件の日本大使館の当事者だった人物だけに、その証言がもっと欲しかったところである。

末川博は（注12）は九月二日の朝、散歩のためホテルを出た途端、そこに出ていた屋台店に並んだ新聞で知った。京都帝国大学助教授であった末川は、海外研修のため三日前にパリに到着したばかりであった。「どの新聞も第一面に日本のさまざまな写真をのせて最大の活字で、「日本の大地震」という見出しをつけている」という大々的な報道だったようである。「さまざまな写真」も載っていたという点が注目される。「最初は九州地方以外は全部地震に襲われて日本という国の大半が消え去ったのではないかとさえ思われた」が、「時がたつにしたがって、箱根山以東が一面の海になっているような報道から東京、横浜を中心とする震災であるという報道にしぼられてきた。」という。また、パリの官公署は半旗を掲げて弔意をあらわし、フランスやベルギーでは教会が救援金の募集をはじめたとも記されている。ただ、「日本が第一次大戦で連合国として協力したことに対する感謝の意もふくめたと思われる」という解釈はやや手前勝手というべきであろう。先の石井漠の自伝には、なかばあきらめて仲間とビールを飲みながら笑ったりもしていたので、宿の婆さんから叱られたという逸話があったが、それと似たような逸話も記されている。下宿のおばさんが、あなたたちはトウフというものを食べるかと聞くので、日本人はみんな食べると答えたところ、「日本の人たちがあんな大地震にあっても悲しそうな顔をしないで落ち着いているのは、トウフを食べているからだ、という話を聞いたので」といったという逸話である。「どこの国にも知ったかぶりをする半可通がいて、もっともらしい話をつくり出すものだ」と述べられているが、そのとおりであろう。それはともかく、東日本大震災の際にも、日本人の冷静な行動が世界中から称賛されたことは記憶に新しいが、比較的冷静だというのは日本人の気質といえるのかもしれない。もっとも、それもまた「半可通」の言を出るという保証はないが。なお、末川の自伝は自身を「彼」とする三人称で書かれていたが、震災を知ったときの記述は、「別添」として加えられた一人称で書かれた部分に記されていた。

坂本繁二郎（注13）もパリで知るが、「大正十二年九月一日、関東大震災の報はパリに届きました。」という記述があるだけである。画家の坂本は、絵の勉強のためパリに滞在していた。

イギリス――ロンドン・オックスフォード

浜田庄司（注14）はイギリスのロンドンで知るが、いつ何によって知ったのかは記されていない。陶芸家の浜田は、同じく陶芸家のバーナード・リーチの帰国

に同道してイギリスにわたり、ロンドンに滞在していた。「東京は廃虚(ママ)と化したという恐ろしいニュースが届いた。」とあり、「死者何十万というわさが流れ、私も父母や弟妹のことが心配でならなかった。」とあるだけである。ただ、少々面白い記述がある。それから何日してからかは分からないが、奈良の富本賢吉や京都の河合寛次郎から、「東京はもう共産党の天下になっているらしい。やきものどころではない。帰っても仕方がないから、そちらに永住せよ」という手紙が届いたというのである。富本賢吉、河合寛次郎はいずれも陶芸家である。だが、そのあとがある。間もなく届いた次の便では、「大丈夫だ。すぐ帰って来い」とあり、胸をなでおろした。その手紙には、「岩崎小弥太さんが、震災でやきものを全部だめにして寂しくて仕方がないから、いいものをどんどん作ってほしいと言われている。」とも書かれてあったという。岩崎弥太郎は、いわずと知れた三菱財閥の四代目である。

柳田国男(注15)もロンドンで知るが、やはりいつ何によって知ったかは記されていない。柳田は、スイスのジュネーブで国際連盟の委任統治委員の仕事をしていたが、そのときはロンドンに行っていた。震災を機に帰国した人々がいたことは梶井剛や伊藤清などの記述にもあったが、柳田はその口であった。ただ、なかなか船が得られなく、「やっと十月末か十一月初めに、小さな船をつかまえて、押しせまった暮に横浜に帰ってきた。」と記されている。梶井や伊藤の記述ではいずれもシベリア鉄道であったが、柳田は船であった。「ひどく破壊せられている状態をみて、こんなことはしておられないという気持」になったというが、その結果が「本筋の学問のために起つという決心」であったという記述だけで終わっているのは少々もの足りない。

この二人はロンドンで知ったが、オックスフォードで報に接したのは、高倉徳太郎(注16)である。神学者で牧師でもあった高倉は、イギリスに留学中であった。近くの店の店員が、あまりに平然としている自分を訝しがって、大震災を知らないのかと尋ねてきた。そこで、隣家から新聞を借りてきて読んだというのである。九月四日のことであった。その時の気持ちは、「魂が腰をぬかしたやうなあんばいで、実に悲愴(サッド)な気に囚はれた」、「魂はどうしても底のない穴にめいりこむやうで、しかたがなかつた。」と表現されている。それからロンドンに向かったのであろう。「ロンドンで夕方斎藤勇君と共に安否のわからない東京の家族や友人の上を案じつゝしほれきつた心でリーゼント・パークの側を歩き廻つた」という記述がある。それほどの衝撃を受けた高倉であったが、帰国することは思いとどまった。「日本にすぐ帰つて同胞と共に苦みたいと幾度も念うたが、ついに思ひかへし」たという。

スイス――リュシュリコン

天野貞祐(注17)は、チューリヒ湖畔のリュシュリコンという村のホテルに滞在していた。学習院教授であった天野は、海外研修でドイツのハイデルベルクに渡ったが、旅行でスイスに行っていた。九月二日の日曜日、昼食中にホテルの主人から聞かされた。「Herr Amano! Ganz Yokohama und halb Tokyo sind zerstört!(横浜全部と東京半分は破壊されてしまつた!)」という。主人によれば、ロンドンからチューリヒのある商店に知らせが入り、このホテルに日本人のいることを知っていた店主がすぐに電話をしてきたというのである。「思いがけぬ衝激(ママ)に当惑しながらも私はスイス人の親切に心からの感謝を禁じえなかつたのである。」とそのときの気持ちが記されている。翌朝、故国からの知らせを待つためにハイデルベルクへと向かう。車中、今日の新聞を読んだかと中年の婦人から聞かれ、否と答えると新聞を貸してくれた。九月三日の朝刊「フランクフルテル・ツァイツング」であった。「日本の大震災」の見出しのもと、「皇居は焼けつつある。数名の大臣は即死。横浜鎌倉は津浪に襲われ、江の島は海中に没失。鎌倉御用邸は倒壊し宮妃殿下御薨去。」等々と記されていた。それを読み、御用邸近くに住んでいた家族の運命に絶望したとも記されている。だが、その後十日ほどして幸い「一家無事避難」の電報を受け取った。

矢代幸雄(注18)もスイスにいたが、どの都市にいたかは記されていない。また、いつ何によって知ったのかも記されていない。美術評論家の矢代はヨーロッパ遊学中、スイスに滞在していた。「私の故郷即ち横浜は、最悪の震災地であったがために、父は出かけて行った先で死に、家は丸焼け、留守居をしていた母の命だ

けが助かった。」と記されている。一人息子であった矢代は、それを聞いて急いで帰国することを決心する。だが、友人たちの説得により結局は残ることにしたという。

二　海外――アメリカ

アメリカ――ニューヨーク・シカゴ・ポコノ

石原謙（注19）は九月一日にニューヨークで知った。東京帝国大学助教授であった石原は、ヨーロッパでの海外研修を終え、八月二十五日にイギリスを立ち九月一日にニューヨークに着いたばかりであった。「もちろん何の正確な詳報も得られず親戚知友の消息も全くわからなかった。」と記されているが、何によって知ったのかは記されていない。数日後に分かったことは、予約していた春陽丸が病院船として使われるために米国に廻航されなくなったということであった。そこで、急遽サンフランシスコに向かい、九月十八日発の大洋丸に乗船した。船は急の帰国者で超満員であった。そして、十月四日にほとんど全壊した横浜に着いたという。最後は、「そこには上陸者の下船を迎える桟橋さえも壊れ、我々のために準備された一輪の花もなかった。」とやや情緒的な記述で終えられていた。

同じくニューヨークにいたのは、大内兵衛（注20）である。東京帝国大学助教授であったた大内もまた、ヨーロッパでの研修を終え、十日ばかり前にニューヨークに着いたばかりであった。知ったのは九月一日のことだったというが、何によったのかは記されていない。「あることないことを伝え、一犬虚をほえて万犬実を伝え、今にも全東京が水に浸たり、火に焼けるということになった」といった報道だった。また、他にはない珍しい記述がある。「ニューヨークの日本人でこの報におどろいて自殺するものが出るという騒ぎとなった。」というのである。そこで、予定をとりやめできるだけ早く帰国することにした。「九月十何日かサンフランシスコを立って十月四日、横浜についた。」と書かれているから、たぶん石原謙と同じ船で帰ってきたのであろう。石原はやや情緒的なことばをつづるだけで終えていたが、大内は少しく被害状況を記している。「海上から見ると、焼落ちた家の鉄骨だけが目立った。桜木町駅はボロボロで、石ころばかりで歩くところをみつけるのに困った。」とある。また、東京に着いて大学へ行ってみたときのことも記されている。「あの美しかった図書館も、あの美しかった文学部の本館も、法学部の教室も、何もかもなかった。要するにわれわれの経済学の城は焼け落ちて全潰していた。」

市川房枝（注21）はシカゴにいた。市川は、婦人問題・労働問題研究のためアメリカに留学中であった。九月一日の十一時ころ、町へ買い物に行ったついでに買った新聞で知ったという。買い物に行ったときというのだから、たぶん午前の十一時であろう。周知のように、関東大震災が起こったのは九月一日の正午少し前のことであるが、いうまでもなくアメリカはまだ八月三十一日であるから、あり得ないことではない。ただ、九月一日の朝の新聞に間に合うかは微妙なところであろう。石原も大内も九月一日に知ったと記していたが、新聞で知ったとはいっていなかった。ちなみに、ヨーロッパは九月一日の未明になる。先に見たように、ベルリンにいた梶井剛は九月一日に知ったというが、ホテルの晩餐会の最中だったといっていた。パリにいた佐藤尚武も九月一日に知ったというが、夜遅く電報で知ったと記していた。それはさておき、シカゴの新聞には「大見出しで大地震で日本は陥没したらしい」と記されていたが、細かいことは何も書いていなかったという。翌朝早く、また新聞を買いに行った。「陥没したのは江の島でほかは無事だが、東京の大部分は火事で焼けた」ということで、少し安心したが、親族や友人たちに早速見舞いのはがきを書いたと記されていた。市川は翌一九二四年一月中旬に帰国するが、そのときのことも簡単だが記されている。「震災からはすでに五カ月近くたっているのに、横浜の市街地は全く復興していなかった。東京までの沿道もバラックや小さい家が並んでい」た。もうひとつ、他の自伝には記されていない記述がある。「サンフランシスコでは、日本の大地震のあとなのでいろいろな品が関税なしに持ち込め」たという記述である。

藤田たき（注22）はアメリカのポコノで知った。藤田は、日本婦人米国奨学基金を得てアメリカに留学していた。クエーカー教徒の日曜礼拝の席であった。日曜礼賛があった日だとしたら、九月二日のことであろう。周知のように、震災が

起こったのは九月一日の土曜日であった。先に見た天野貞祐は、正しく九月二日の日曜日といっていた。一人の老紳士が立ち上がり、「今朝の新聞によると、日本に大変なことが起ったようです。東京、横浜も潰滅とか。お見かけすると、ここに日本の女性がいられるようです。日本に対しどう援助の手をのべたらいいかおしらせいただきたい」と述べたという。震災のニュースはこのような形でいち早く知ったが、「学校全焼。一同無事」の電報が届いたのは一週間後のことであった。「学校」とは、のちの津田塾大学のことである。

メキシコ――メキシコシティー

石射猪太郎（注23）はメキシコのメキシコシティーで知る。石射は、在メキシコ日本公使館の書記官であった。「関東大震災の報道が私にショックを与えた。神田に居住の家父の消息が、十数日後にようやく判明したのであった。」と記されているだけであるが、帰国したときの記述がある。帰国は翌一九二四年五月末であった。「震災から立ち上ったばかりの横浜は、ある外人記者が形容したように、鉱山町（マイニングキャンプ）の様相を呈していた。」という。「鉱山町（マイニングキャンプ）」とは要するに瓦礫の山だったということであろう。また、「すぐ難渋を感じたのは交通機関だった。電車は停電と事故の頻発であり、乗り合い自動車は腰を掛けていてさえ、頭がつかえそうな名ばかりの改造バスが幅を利かせ、タクシーはまだ少なく、自家用車が民衆の反感の種となっていた。鋪装街路も稀であった。」といった記述もある。

三　海外――アジア

ロシア――ウラジオストク・ユジノサハリンスク

荒畑寒村（注24）はウラジオストクにいた。荒畑は、ロシア共産党大会に出席するためにモスクワへ行ったその帰りであった。九月の四、五日ごろに、沿海州共産党の機関新聞「クラスヤナ・ズナーミヤ」で知った。「前古未曾有の大地震が起って、東京から門司までの都邑が一挙に全滅した」という報道であった。そのときの気持ちは次のように記されている。

獄中の同志、獄外の同志、家族、友人、すべて不慮の最期をとげたに違いない。ひとり不自由な生活に耐えて、いつとも知れぬ私の帰国を待っている妻や、故郷の父兄もおそらく悲惨な運命をまぬがれなかったであろう。ああ、私にはもう帰るべき国も、家も、会いたい同志も、家族も、みな失われてしまった！　それがこの瞬間、一度に、無秩序に、私の脳裡をゴッタ返した想念であったのである。

数日後、「大阪の新聞」が到着し、第一報があまりに誇大であることを知っていくらか安心した。ウラジオストクの市中では、救援の資金を作るためにロシア人、中国人、在留邦人によって「震災救恤演芸会」が開かれたという記述もある。荒畑は、これを機に帰国を決意する。十月の中旬、イギリス商船でまずは上海へ向かう。途中、台風にあい芝罘（チーフー）に寄港するが、そこで英字新聞の「ノース・チャイナ・プレス」に接する。そこには、「裸形（らぎょう）の屍体が累々として横たわっていたり、満目蕭条たる焼跡に石造の建物がポツンと一つ、取残されている写真」も載っていた。それを見たときは、「この廃墟の中へ帰って行ってどうしたらよいのかと、絶望に似た想いに圧倒されるようであった。」と述べている。上海に到着すると、幸運にも同志の人物に出会い、震災の詳細を聞くことができた。「獄中の同志や私の妻の無事、レーニン号が日本政府から碇泊ならびに救恤品の寄贈を拒絶されたこと」などを知った。レーニン号の件は羽仁五郎の自伝にも記されていた。また、「大杉栄夫妻が憲兵大尉甘粕某のために殺害されたことや、南葛（なんかつ）労働組合の川合義虎その他の同志が軍隊のために同じ運命に会ったこと、自警団や軍隊による鮮人の大虐殺がおこなわれた事」も知ったという。十一月上旬、長崎に到着するが、すぐに東京には向かわず大阪、福井へと移動する。長崎に着いて「難波大助の摂政宮狙撃事件」を耳にしたからである。いわゆる虎の門事件である。ただし、虎の門事件は十二月二十七日のことであるから、それは誤りであろう。少なくとも、長崎に着いたときではなかった。もっとも、大杉栄や川合義虎の殺害、「鮮人の大虐殺」を聞いていたのだから、すぐに東京に向かわなかったのはもっとも

のことであろう。

東京に入ったのは十二月の上旬であった。虎の門事件のときにはすでに東京にいたのである。「上野駅の構内を一歩出た途端、火事場の跡のような焦げくさい臭いが私の鼻をついた。かつて昼を欺いた広小路の夜景はどこにもなく、黒々とした荒野原のところどころには、板囲いやバラックが極月はじめの風に吹かれて寒ざむと立っていた。」と記されている。「極月はじめ」とあり、また「震災からすでに満三ヵ月」とも記されていた。「広小路の夜景」とあるが、上野に着いたのは夜で、人目を避けるためにあえて選んだ時間帯であった。それからわが家へと向かう。「八ヵ月ぶりでわが家に帰った。附近にはどこにも異状が認められず、私の家も別に軒が傾いてもいなければ瓦が落ちてもいなかった。」という。その夜、妻から震災当時のことを聞かされた。妻の話しは次のようなものであった。妻は馴染みの髪結のところへ髪を結いに行っていた。

そこへグラグラッと来たので、サンバラ髪で飛び出しはしたものの、烈しい震動に足をとられて地面へ坐ってしまった。眼をあげると、電線が高く低く波打って、雀の群が中空に羽ばたきながら飛び悩んでいた。ヤッとの思いで家にもどったが、それからはまた連夜、天を焦がす大火の延焼をおそれ、鮮人襲撃のデマに脅かされ、頻々たる余震におののき、近所の空地に畳をしいて向う三軒両隣りの人々と、安からぬ思いの幾夜を過ごした。

それだけではない。ようやく落ち着いた頃、大杉栄が末の子を乗せた乳母車を押しながら訪ねて来たという。「その翌日、大杉は細君や甥と一しょに無残な最期をとげ」たというのである。

近藤栄蔵（注25）もウラジオストクにいたが、いつ何によったのかは記されていない。ただ、「第一報は上海方面から伝えられた」といっているだけである。近藤は、いわゆる第一次共産党事件で検挙され、釈放された後に亡命していた。「富士山が消えてなくなって、富士山ぐらいの大きさの島が伊豆沖に出来た」という報であった。次の報では「東京全滅」を伝えたが、その次には「帝国ホテルが焼けて、客人たちは日比谷公園へ避難した」と伝えてきた。「けっきょく大山震って鼠一匹」かと思っていたが、「稀有の大震災」であることが「三日目ぐらいにようやく判然してきた。」とあるから、九月一日に知った可能性もある。急遽、「ウラヂオ党支部緊急幹部会」が開かれ、救援船を東京へ派遣することが決議されたという。近藤もその会議に加わっていたという。「船は二千トンばかりのウラヂオ義勇艦隊所属レニン号であった」とあるから、それが羽仁五郎や荒畑寒村も言及していた救援船であろう。だが、羽仁や荒畑もいっていたように、この船は日本政府によって入港が拒絶されたと記されている。なお、近藤の自伝は自身を「栄蔵」とする三人称で書かれていた。先の末川博の自伝のように他にないわけではないが、珍しい書き方であることには違いない。

ところで、荒畑寒村と近藤栄蔵の回想は大きく食い違っているが、二人は同じウラジオストクに滞在していたというだけでなく、実は同じ所に住んでいたらしい。いずれも「ダチャ」という別荘に共同で生活していたといっている。近藤の自伝には、「そこへまた、モスクワから帰途にあった荒畑寒村が、チタでひろった辻井民之助同伴でやってきて、別荘はにぎやかになった」と記されていた。荒畑もまた、辻井とともにその別荘に案内されそこで過ごしていたといっていた。そこには、佐野学や高津正道に加え、近藤栄蔵もいたとはっきり記されていた。ただ、「近藤はすでに下関の先例もあって、信頼しえない性格が立証されている。」という記述があった。記憶違いということはもちろんあろう。だが、かたや四、五日ごろに共産党の機関紙で知ったといい、かたやはっきりとは記されてないものの上海方面からといい、早ければ一日に知ったとも考えられるのであった。それだけではない。荒畑は上海に到着してレーニン号の件を知ったといっていたが、近藤によればレーニン号の派遣そのものを決めたのが近藤たちだったのである。

もう一人、ウラジオストクにいたのは中西悟堂（注26）である。歌人にして詩人の中西は、朝鮮半島の清津（せいしん）から船でウラジオストクに入港してすぐに知った。九月三日のことだったというが、何によって知ったかは記されていない。ウラジオストクからとんぼ返りで清津に引き返す船には、日本へ帰ろうとする何人かの日本人がいた。その人たちの話しによれば、「関東平野はことごとく水没して、

あちこちの山の頭がぽつぽつと見えるだけ」、「河川という河川が氾濫し、その水面下に全滅した東京の市街が沈んでいる」ということであった。中西もその船で清津に引き返し、それから釜山に向かった。「東京では朝鮮人が井戸という井戸に毒物を投入している」とも聞いたので、下車の際は団体で行動したが、「駅前の鮮人たちは案外に平静で、大震災のために集団帰国する我々にいたわるような目を向け」たという。釜山に着いてから得た情報は次のようなものであった。

上野動物園の猛獣や浅草花屋敷の動物大蛇どもは、檻が倒れて一斉に逃げ出し、吉原の遊郭へは獅子や虎があばれこんで、大勢の遊女たちが、家の倒壊と火災と猛獣に追われ、髪をふり乱し、胸も腹も腰も腿も丸出しの肌のまま右往左往し悲鳴をあげて走り廻っている。

釜山から船に乗り日本に戻るが、何日のことで、またどこに着いたのかも記されていない。ただ、その足で松江市に行ったと記されている。そこでしばらくは東京の友人たちからの情報を待つことにした。やがてぽつぽつと消息が届いた。「知合いの詩人や文士は一望瓦礫の東京から大部分は地方へと散ったが、中には、俺だけは焼跡の灰の中にとどまって何とかやりぬくゾというハガキをよこす者も二、三にとどまら」なかった。それに刺激され、東京に戻る決心をしたのは十月のはじめであったという。東京では親戚たちの家は焼けてなく、その行方も分からなかった。「本所の被服廠跡へも行ったが、焼死体がまだごろごろしている中には、あぐらを姿で両腕を高くさし上げたままの黒焦げの死体もあった。」という記述もあるが、震災から一か月以上たった十月はじめだったとすればそれはあり得ないであろう。

太田武雄（注27）はユジノサハリンスクで知った。九月二日の午前三時頃に知ったというが、何によったのかは記されていない。王子製紙の社員であった太田は、自社工場を視察するためにサハリンに渡り九月一日の日没後、ユジノサハリンスクに到着した。いうまでもなく、当時サハリンは樺太と呼ばれ、その南半分は日本領であった。ユジノサハリンスクもまた豊原と呼ばれており、太田はむろんそれらの名で呼んでいる。「関東に大地震が起って東京は陥没して見えないとか、東京、横浜間は火の海、通信機関が杜絶して詳細不明。ただ、飛行機で遠く望見するだけ」ということであった。翌九月三日の早朝、船に乗り、昼過ぎに小樽に着いた。そこで食糧を調達し、午後八時頃に青森に到着する。それから青森駅に向かい列車に乗った。「待合室は、避難者と上京の見舞客でごった返していた。」という。翌九月四日の午前八時過ぎに大宮に着き、そこで降ろされた。大宮ではすでに戒厳令がしかれていた。何とか列車に乗り込むことができ、王子に着いたのは日没時であった。そこで留守家族が皆無事であることを知る。被災地を直接見たのがいつだったかは記されていないが、そのときのことは次のように書かれている。「神田、日本橋地区の被災地区は想像もしていなかった一面の焼野原となり、道路の区画を識別するだけで土蔵、金庫、器物の、累々たる残骸は惨たんたるもので、各所ではなお余焔を上げていた。遥かに下町方面には、まだ入道雲のような煙雲を望見した。」

韓国――釜山・ソウル

玉川一郎（注28）は韓国の釜山にいた。九月二日の昼ころだったというが、何によったかは「風の便りというのか」、と曖昧である。玉川は受験に失敗し、東京で受験勉強をしていた。八月になると暑くてやり切れなくなり、釜山の海水浴場が懐かしくなり釜山に渡った。警察官をしていた父親の関係で一年半、釜山の中学校にいたことがあったのである。八月三十日、関釜連絡船で帰ることにしたが、午後から暴風雨となり、三十一日になっても九月一日になっても収まらなかった。そうこうしているうちに、「東京は地震で全滅したらしい、という噂が、街にひろがり出した」というのである。ただ、情報の出所に関して、「東京大地震のニュースは海底電線の故障や、不完全な無線のため伝わらず、晴天の日には釜山沖から島影のハッキリ見える対馬（つしま）から来た漁船から入手したものだという噂であった。」といっている。だが、暴風雨で連絡船が欠航しているなか、漁船が航行しているとは考えづらいであろう。やがて「釜山日報」が続々と号外を発行しはじめた。「今でも覚えている」という当時の号外の記事は次のように記されて

いた。

「俳優尾上菊五郎氏の談によると、小田原海岸を進行中の車窓から、目前の大島がズブズブと海中に陥没して行くのを目撃した」

「海軍省の某中佐談によれば、赤煉瓦造りの海軍省の建物は、掌上の銀玉チョコレートのように動揺したが、鉄骨造りでもないのに、僅かな亀裂だけで倒壊はまぬがれた」

「上野公園の桜の枝は、大震災の惨状に絶望した避難者の首吊りで一ぱいとなり、自分が縊死する為に、すでに死んでいる縊死体をおろしたりしている」

「隅田川は死体で一ぱいとなり、その上を歩いて対岸に行けると言われている」

引用中の「銀玉チョコレート」については、「中にクリームを入れ、チョコレートで包み、それを銀紙で包んだもので、半球形だから坐りがよ」かったからだと説明し、「海軍軍人のハイカラ性を描写したの」だろうと推測している。その通りなのだろうが、比喩としてもあまり適切とはいえないであろう。釜山を出発することができたのは九月も終わるころであったというから、一カ月近く留まっていたことになる。その理由を、「内地での不当な朝鮮人圧迫による反撥をおそれて、おっかなびっくりの自警団が組織され、それに加盟させられたのが、ようやく取りやめになったからであった。」と説明している。地震から一カ月ほどたち東京に戻ったときのことは、「市電の窓から見た本郷までの街は、焼け跡処理の瓦礫、木材を積んだトラック、荷馬車、大八車、そしてそれらの捲き起す土煙りに蔽われていた。」と記されている。また、「日本の大ビルディングといわれた丸ビルの窓々の下にX型の亀裂が、判で捺したように並んでい」たといった記述もあった。丸ビルは倒壊をまぬがれたが、浅草の凌雲閣は倒壊した。浅草十二階ともいわれた当時最も高い建造物であった。それを目撃した女学生がいた。それが、のちの妻だったというのだが、結婚後に話しを聞いたのであろう。その妻の証言も聞いておこう。

「学校の二学期の始業式が終ったら、お友達で浅草から通ってる子が、家に来ないかって言うんで、池の端の学校からぶらぶら歩いて行ったんです。あの頃はちょっとした距離は電車なんかに乗りませんものね。話しながら歩いて、田原町の角を左に曲がった時、ずしーんと世界じゅうが鳴るような音がして、身体が二尺ぐらい跳ねとばされて、地面に投げ出されたんですの。立てないんですよ、地面がゆらゆらもくもく動いていて。泣きながら顔をあげると、今の国際劇場の向い側の映画街のはずれに立っていた十二階の天っぺんのあたりが雪崩のように、崩れるものが見えたんですよ。土煙りを上げてね。まだ、どこも火が出る前ですよねえ。やっと立ち上がると、電車通りづたいに本郷に戻ったんですけど、上野の広小路あたりまで来た時、あっちこっちから火の手が上がったと思いますよ。でも、十二階の倒れるのを見た人ったら、日本じゅうに百人くらいいるかしら？」

凌雲閣倒壊を目撃した人は確かに多くはなかったであろう。その目撃証言も極めてまれである。孫引きという形にはなるが、あえて引用したゆえんである。

玉川の自伝には興味深い記述が少なくない。翌一九二四年一月に起きた地震についての記述もその一つである。一月十日の早朝、激震に「悲鳴をあげて跳ね起き、枕許の机につかまった」という。余震と見られている地震である。だが、隣に寝ていた従弟はわざと欠伸をしながら、「フン、こんなのなんだい、ちいせえ、ちいせえ、九月のにくらべりゃア、孫みたいなもンだ」といった。それで、「これが孫なら、九月一日の大地震はたいしたもんだなア、やっとその大きさの見当がついたのであった。」と記されている。マグニチュードという言葉を知ったのも戦後のことであるという記述もある。さらには、この時代に流行った言葉があるという。「この際」という言葉であった。「この際だ、それでいきましょう」「このさい、これで手を打って下さい」「この際だ、我慢しちゃえッ」というように。

林省三（注29）も韓国にいた。はっきりとは記されていないが、たぶん釜山である。いつ何によって知ったのかは記されていない。林は、朝鮮併合後まもない

一九一一年に朝鮮半島に渡り、農業を中心として様々な活動をしていた。「その被害は一府八県に亘るという。大地震が突如として起きるや、天柱を砕き地軸を撼かし、劫火、海嘯忽ちにして阿鼻叫喚の巷となり、死者無数、傷者は鮮血にまみれて逃げ惑うたという。」というように、美文調のやや紋切型の記述であり、それに続けて次のような記述があるだけであった。「その人心の動揺の極に達しているさ中に、更にまた朝鮮人の狂暴、不逞鮮人の襲撃などの流言蜚語が盛んに行われ、多数の罪なき朝鮮人が、また朝鮮人に非ざる人々までが間違えられて殺されたと報じて来た。」

丸山鶴吉（注30）はソウルで九月一日の午後六時半ころに知った。ソウルは当時京城と呼ばれていた。ホテルでの宴会に出席していると役所から報告があった。丸山は朝鮮総督府の警務局長をつとめていた。その情報は、「コレア丸」という商船が発した無線によるものであったという。「横浜に大火あり、多分震災の為ならん」というだけの知らせであり、そのときは「夢にもあんな大事件が起つたとは想像しなかつた。」と述べている。翌二日の午前二時ころ、電報が相次いで入ってきた。「東京市内では数十ヶ所も火災が起り、阿鼻叫喚の巷と化してゐる」とか「丸ビルが崩壊して一万人の死傷者を出だした」とかいうことであった。更に夜明けころには、「丸ノ内一帯に起つた火災は益〻猛威を逞うして、宮城さへ危険に瀕し、軍隊が出動して防火に盡力してゐる」という電報が届いた。だが、いずれも公報ではないので、様々な手段を講じて情報を収集しようとした。しかし、それ以上の情報を得ることはできなかった。三日になっても公報は来なかったが、晩になって「朝鮮人騒ぎ」が起こったという情報が入ってきた。「これは朝鮮にとつて寔に重大なことであると考へ」、「この種の新聞報道を禁止する方針」を採った。東京の朝鮮総督府出張所からの初めての公報が届いたのは、七日の朝であった。それによって、震災の状況一般を知り、また「朝鮮人騒ぎに続いて勃発した問題の真相」も知ったという。その後は、警務局長としての様々な治安維持活動に関する記述が長々と続いているが、割愛する。

台湾――台北・基隆

小園江隆哉（注31）は台湾の台北にいた。九月一日夜の十一時半に知ったというが、何によったかは記されていない。小園江は、当時台湾でさまざまな商売を営んでいた。第一報は「富士山大爆発東京横浜全滅」というものであった。二日の朝になって、「震源地が小田原付近で大地震に次ぐに大火災が東京、横浜に起り殆んど全滅に近い焦土と化しつゝある事、電信電話は全部不通とて真相は不明飛行機の偵察によれば東京市は山の手方面を除き全市が焼土と化し、死者無数避難民は丸の内や千葉、埼玉地方に避難、戒厳令が施行され軍隊の出動によりて漸くに維持が保たれてゐる」との情報が入った。急遽台湾を去ることに決め、中華鍋をあるだけ購入し毛布に包み、荷造りをして手荷物にした。避難民の多くが食なく、また炊飯具がなく困っていると報道されていたからであり、毛布は寝具になると考えたからである。鍋は八十個あったというから大変な荷物だったであろう。また、交通の不便を予想し、自転車一台に加えタイヤ修理材料も十分に用意した。九月六日、基隆出帆の香港丸に乗船する。船は震災関係で馳せつける人々で超満員であり、知人も多く同船していた。船中、中華鍋と自転車を用意した話をしたら、用意周到と皆から褒められたという。むべなるかなである。香港丸は九月九日に門司に入港。この日は、第一次の東京からの避難民も門司に着いていた。「其人々から実況も聞く事が出来、本所被服廠の惨事も目撃者から聞いた。」という。船はそれから神戸に向かい、十日朝に上陸した。十一日午前、さらに長崎丸に乗船し東京に向かう。船はまたもや超満員で、罹災者の救護に向かう幾組かの団体もあった。十二日、東京湾に到ると「海面は一面に油が流れ居り、漂流する幾多の材木の破片等」が浮かんでいた。通信不能と小蒸気船の不足のためなかなか上陸できず、しばらくたってやっと霊岸島に上陸できた。

翌日から老母や親戚知友の避難先を訪問したといっているが、安否をはじめそのほか何ら記されていないのは不思議である。おそらくは無事だったのであろう。十七日、知人等訪問のため無蓋列車で横浜に向かった。「横浜の被害は一般的に東京より一層甚だしいので、街路に屍体のまだ其儘に放棄しあるのが其所彼所に多く見受けられ、焼跡に避難先が記されて居らぬものが半数以上である。」とそ

の時の様子が記されている。食糧不足を知り、急遽函館へ食料を調達しに行くことを思い立つ。なぜ函館なのかは記されていないが、塩鱒や昆布を運んで来ようと思い立ったといっている。中華鍋の大量購入といい、自転車や修理材料の用意といい、その行動力には驚かされる。翌十八日東京を立ち、途中仙台の義兄夫婦にもとに立ち寄り、二十日に函館に着いた。計画通り塩鱒と昆布を購入し発送した後、東京に戻った。「帰京後此の昆布や塩鱒を東京市中の千住や大塚、四谷方面にて薄利で売捌き大衆から非常に喜ばれたものである。」という。また、件の中華鍋については、「焚出し用に供し又は昆布と豚肉等を汁煮にして売出しの用途に用い重宝されたのである。」と述べている。だが、小園江の行動力はそれにとどまらなかった。船舶が不足していると聞き、購入すべく十一月初旬、再び台湾に渡ることになるのだが、少々くだくだしく、またテーマからもややずれることになるので割愛する。

梅中軒鶯童（注32）は台湾の基隆で知る。浪曲師の鶯童は巡業で台湾に渡っていた。九月一日が基隆での初日であった。正午だというのに長蛇の列で、「その時何かビリビリッと身体に感じたものがあった」という。開演の午後五時には超満員となったが、開演直後に街に号外が飛んだ。地震の起きた時刻が十一時五十八分だと知り、「あ、あの時だったのか」と思ったというのである。「ビリビリッと身体に感じた」ときである。夜に入ってから、第二報、第三報と号外が続き、朝になっての号外で詳報が手に入った。二日目の公演には数えるほどの人しか集まらなかった。

中国――錦州・上海

石光真清（注33）は中国の錦州にいた。石光は軍人で、長らく満州方面で諜報活動をしていたが、二年前に軍を辞め商売を営んでいた。知ったのは九月一日の夕刻に近かったというが、何によったのかは記されていない。「名古屋以東は鉄道も電信、電話も不通で詳細はわからないが、飛行機の偵察によれば関東平野は地盤の沈下のためか海嘯（つなみ）のためかわからないが一面の海原と化し、白い波濤の狂っているのが望見された」という情報だった。はじめは「中国式の白髪三千丈、垂涎三尺といった類いの表現であろう」と思ったが、深夜になって都督府から情報が入った。「関東から湘南一帯の都市に大火災が起り戒厳令が布かれた。死傷百万を超える見込」とのことであった。都督府の情報であれば確かだと思い、東京に戻る決意をする。十日ほどを費やしてやっと東京にたどり着いた。幸い家も焼かれず、家族も無事であった。「突然の帰京に驚き喜ぶ家族に囲まれた時に私は腰が抜けたように玄関先に坐りこんでしまった。涙が溢れ出た。重い袋を担いで来たので顔中汗と涙でくちゃくちゃになった。」とそのときの様子を記している。家族たちから聞いた話として、「朝鮮人狩の不祥事件」が次のように記されていた。

> 庭続きの近衛野砲兵連隊では営庭に砲列を布いて一斉に空砲を撃ち放った。何事であろうかと街路に飛び出て来た町民たちに、オートバイに乗って来た週番士官が演説口調で呼びかけた。「多摩川河畔にそって撃（ママ）来した不逞朝鮮人と目下わが軍が交戦中であるが、諸君は安んじてもらいたい。しかし万一の場合のために外出を控えて朝鮮人の侵入を警戒してもらいたい」とふれまわった。非常召集された消防団が各方面から朝鮮人を逮捕して来て連隊の営倉にぶちこんだ。血塗れになって曳かれていった者も多かったそうである。

内山完造（注34）は中国の上海で知るが、いつ何によったかは記されていない。ただ、「香港から伝って来」たとだけ記されていた。内山は上海で書店を経営していた。報道は「東京全滅」というもので、一報ごとに被害区域は拡大していった。早速、募金活動を行なったと記されている。九月二十日になって、罹災した友人が上海にやって来てその実情を知ることができたという。他には、「大震災のどさくさに乗じて大杉栄夫妻と一人の幼児を虐殺して、その死骸を古井に投じて罪跡を覆わんとした事件に対して私は非常に憤慨した。」という記述がある。それだけではない。「大震災についてもっとも遺憾に思うたことは朝鮮人虐殺と、その余波が中国人にまで及び多くの犠牲者を出したことである。」とも述べていた。

ところで、内山の自伝は極めて珍しい書かれ方がされていた。生まれた年の一八八五年から還暦の一九四五年までの完全な編年で記されているのである。しかも、各年の冒頭にはかなり詳細な年譜が記されていた。本人に関するものではなく、一般的な出来事に関する年譜である。その年譜の後に、「追加事項」として自伝が記されていたのである。「追加」というのが面白い。さらには、その冒頭は決まって「内山完造〇〇歳。」あるいは「内山完造〇〇歳になる。」と記されていた。もっとも、それ以後三人称で記されているわけではなく、一人称で記されてはいた。

シンガポール

井上正夫（注35）はシンガポールで知ったが、いつ何によったのかは記されていない。新派俳優で映画俳優でもあった井上は、ヨーロッパへ行く途中シンガポールに寄港した。その入港した日であったという。「蠣殻町の留守宅も勿論無事ではあるまいと思ふと、急いで帰りたい気がする。しかし、遠く故国を去つた船旅の途中では、一人だけ飛んで帰る術もないのです。」とそのときの気持ちが記されている。その後、マルセイユに上陸しパリに着いたときには、「留守宅は丸焼けになつてしまつたが、家族は無事であつたといふ報を受取ることができたのです。」と述べている。

四　海上

以上が、海外において知った場合である。いよいよ国内ということになるのだが、それ以外に、いわば海外と国内のあいだというケースが存在する。移動中の船、すなわち海上で知った場合である。

志賀直三（注36）はフランスのマルセイユを出港し、スエズ運河を通り紅海に入っていた。慶応大学予科の学生であった志賀は、アメリカ留学を終えヨーロッパをまわり帰る途中であった。九月一日、乗船の榛名丸にニュースがもたらされた。「日本に一大強震襲来――詳細不明」、次いで「仙台、京都間全滅／姿を消した富士山」、そして間もなく「関東一帯全滅、津波に洗われる東京市／大島、海中に陥没、新しい島、出現」という報が入ってきた。「船中の人々は、急に我に返つたように騒ぎ出した」というが、「わたしは相変らずデッキで、スペインの若い細君やタイの娘相手にダンスを踊つていた。」という。また、帰ってからの記述部分には次のような記述があった。「大震災直後の東京に六年ぶりに帰つたわたしには、改つて帰朝といつたような感慨も湧いて来ず、大天災と所謂あの馬鹿らしい鮮人さわぎの恐怖から覚め切つていないような東京のざわめいた空気の中に、いつしかわたし自身も溶け込んでしまつていた。」

中川善之助（注37）は横浜を出港し、明日はシンガポールへ着くという所まで来ていた。東北帝国大学助教授であった中川は、ヨーロッパ研修に行く途中であった。九月一日、「Terrible earthquake, Tokyo practicaly destroyed.」という無電を受けたという。志賀の自伝には記されていなかったが、当然それも船の無電によったものであろう。だが、その他の記述はない。「この有名な関東大震災の報を聞きつつ、私たちは振り返えりもしないで、毎日西へ西へと向学の心に燃えながら祖国を遠ざかって行った。」とあるだけである。

藤原義江（注38）は台湾を出発し横浜に向かっていた。オペラ歌手であった藤原は、台湾への演奏旅行から帰る途中であった。何日のことだったかは記されておらず、またそのときのことも記されていないが、東京に戻ってからの記述がある。なぜか帝国ホテルに関する記述ばかりなのだが。「不思議なことに帝国ホテルは無事で、壁一つ落ちていなかった。」と記した後、当時支配人の犬丸徹三が外国人客に対し衣食住すべての面倒をみたこと、そしてホテルの食堂ではライスカレーとビーフシチューを誰にも無料でサービスしたことが記されている。このことは、「ニューヨークタイムス」や「ロンドンタイムス」にも載って、大きな評判になったという。

朝比奈泰彦（注39）はマルセイユを出港し、すでに日本に到着せんとしていた。東京帝国大学教授であった朝比奈は、ヨーロッパ研修から帰って来るところであった。九月一日に徳山沖を航行中、無電が東京とも横浜とも連絡不能になり、船中騒然となった。乗船の箱崎丸は夜八時に神戸に入港しようとしたが、明朝

まで待ってくれとのことだった。「ここで関東大震災の報を得た。」という。二日朝、上陸すると号外売りが右往左往し、出迎えの家族や友人も青い顔をしていたという。しばらく大阪に滞在した後、船で東京に向かった。先に見た小園江隆哉は、周到にも自転車を買い船に乗り込んだが、朝比奈も自転車を買い横浜行きの船に乗り込んだ。船中は超満員であったという。横浜に着くと、自転車を飛ばして東京に入った。「品川まできてみるとまつすぐ上野の山が見える位で、一切悉く焼野原なつている。自宅は無事だつたが、留守居の書生達が泥足で上つていたので惨憺たる有様になつていた。」とそのときの様子が記されている。それから一度大阪に戻り、「薬品とかガラス器具類を二千円程買つて」東京に帰ったのが、十一月十日ころだった。薬品やガラス器具は研究に使うためである。朝比奈は薬学の研究者であった。だが、「大阪で買つたガラス器具は品質が悪くて、誰も使わぬままいつまでも残つていた。」という。

注

(1) 拙著『大岡昇平と歴史』（翰林書房　二〇〇二・五）

(2) 拙論『幼少年期の自伝（一）――和辻哲郎『自叙伝の試み』――』（『帯広畜産大学学術研究報告　人文社会科学論集』第10巻第3号　二〇〇〇・三）
拙論『幼少年期の自伝（二）――江口渙『少年時代』――』（『帯広畜産大学学術研究報告　人文社会科学論集』第10巻第4号　二〇〇一・三）
拙論『幼少年期の自伝（三）――西尾幹二『わたしの昭和史――少年篇――』――』（『帯広畜産大学学術研究報告　人文社会科学論集』第11巻第1号　二〇〇二・三）
拙論『幼少年期の自伝（四）――大岡昇平と三つの自伝――』（『帯広畜産大学学術研究報告　人文社会科学論集』第11巻第2号　二〇〇三・三）

(3) 梶井剛『我が半生』（私家版　一九六八）

(4) 小野秀雄『新聞研究五十年』（毎日新聞社　一九七一）

(5) 伊藤清『明治精神に生きる』（私家版　一九六九）

(6) 勝沼精蔵『桂堂夜話　邂逅と郷愁』（黎明書房　一九五五）

(7) 里見岸雄『闘魂風雪七十年』（錦正社　一九六五）

(8) 石井漠『私の舞踊生活』（講談社　一九五一）

(9) 向坂逸郎『わが生涯の闘い』（文藝春秋　一九七四）

(10) 羽仁五郎『私の大学　学問のすすめ』（講談社　一九六六）

(11) 佐藤尚武『回顧八十年』（時事通信社　一九六三）

(12) 末川博『彼の歩んだ道』（岩波書店　一九六五）

(13) 坂本繁二郎『私の絵　私のこころ』（日本経済新聞社　一九六九）

(14) 浜田庄司『窯にまかせて』（日本経済新聞社　一九七六）

(15) 柳田国男『故郷七十年』（神戸新聞総合出版センター　一九五九）

(16) 高倉徳太郎『巡礼者　ある伝道者の自叙伝的文章』（信教出版社　一九四八）

(17) 天野貞祐『忘れえぬ人々　自伝的回想』（河出書房　一九五三）
同　『教育五十年』（南窓社　一九七四）

(18) 矢代幸雄『私の美術遍歴』（岩波書店　一九七二）

(19) 石原謙『学究生活の思い出』（石原謙博士文集刊行会　一九五九）

(20) 大内兵衛『経済学五十年　上・下』（東京大学出版会　一九五九）

(21) 市川房枝『市川房枝自伝　戦前編』（新宿書房　一九七四年）

(22) 藤田たき『わが道　こころの出会い』（ドメス出版　一九七九）

(23) 石射猪太郎『外交官の一生』（読売新聞社　一九五〇）

(24) 荒畑寒村『荒畑寒村自伝　上巻・下巻』（筑摩書房　一九六五）

(25) 近藤栄蔵『近藤栄蔵自伝』（ひえい書房　一九七〇）

(26) 中西悟堂『かみなりさま　わが半生記』（永田書店　一九八〇）

(27) 太田武雄『太田武雄八十年』（キャピタル企画　一九七八）

(28) 玉川一郎『大正・本郷の子』（青蛙房　一九七七）

(29) 林省三『荒野の石　美しき真珠を捜す商人物語』（甲陽書房　一九六四）

(30) 丸山鶴吉『五十年ところどころ』（講談社　一九三四）

(31) 小園江隆哉『回顧六十年』（私家版　一九四二）

(32) 梅中軒鶯童『浪曲旅芸人』(青蛙房 一九六五)
(33) 石光真清『誰のために』(龍星閣 一九五九)
(34) 内山完造『花甲録』(岩波書店 一九六〇)
(35) 井上正夫『化け損ねた狸』(右文社 一九四七)
(36) 志賀直三『阿呆伝』(新制社 一九五八)
(37) 中川善之助『北向きの部屋 学生とともに四十年』(日本評論新社 一九六一)
(38) 藤原義江『流転七十五年 オペラと恋の半生』(主婦の友社 一九七四)
(39) 朝比奈泰彦『私のたどった道』(南江堂 一九四九)

付記 本研究は、日本学術振興会科学研究費(挑戦的萌芽研究 課題番号二三六五二〇四八)の助成を受けた。